The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪方言の補充疑問文と終助詞ナ・イナについて ：形態統語的な特徴を中心に
Author(s)	高木, 千恵
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2018, 52, p. 39-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76084
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪方言の補充疑問文と終助詞ナ・イナについて

――形態統語的な特徴を中心に――

高木　千恵

キーワード：終助詞／ナ／イナ／補充疑問文／ノダ相当形式

1. はじめに

本稿では、大阪方言の補充疑問文（いわゆる「疑問詞疑問文」）に生起する終助詞ナ（*=na*、＝は接語境界を示す。以下同じ）およびイナ（*=ina*＜*=i =na*）について、その形態統語的な特徴の記述を試みる。本稿が扱うナ・イナとは、具体的には次のようなものである。[1)]

（1）　アン［タ］　シヤ［ク］ショ　［イク　ユーテ］タケド、イツ［イク］ンナ。
（あなた市役所に行くと言っていたけれど、いつ行くのよ）

（2）　A：ワタ［シ］、ヤッ［パ］リ　［イカントク］ワ。
（わたし、やっぱり行くのをやめにするよ）
B：エ［ー］、ナン［デ］ーナ、イッショニ　［イコ　ユーテ］タヤン。
（えー、なんでよ、一緒に行こうって言っていたじゃない）

例文（1）に示すように、当該の終助詞ナはノダ文の補充疑問文に使われ、真偽疑問文や、ノダ文でない補充疑問文には使われない。一方イナは、（2）のように疑問語（ナンデ）に直接つくほか、「ナニ［ガ］イナ（何がよ）」のように「疑問語＋助詞」で構成される句の後にも生起する（詳しくは4節を参照）。本稿ではこの二つの終助詞について、形態統語的な特徴を中心に記述する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず終助詞ナ・イナにかかわるこれまでの記述を概観し、問題のありかを整理する（2節）。続いて、議論の前提

となる大阪方言の疑問文について3節でまとめ、4節でナ・イナの形態統語的な特徴を記述する。そのうえで5節において、大阪方言における終助詞ナ・イナの特異性について論じる。最後に6節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究と問題のありか

2.1. 大阪方言のナ・イナについて

大阪方言について概説的に書かれたものには山本（1962）、山本（1982）や郡編（1997）があるが、いずれも平叙文（あるいは命令文）に生起するナについての言及があるのみで疑問文に現れるナには触れられていない。一方、『大阪ことば事典』（牧村1979）には「ナ」と「ナァ」の両方が立項され、さらにこれらとは別に「ナンデェナ」の項がある。個別の詳しい分析はないものの、命令文や勧誘文につくナと平叙文につく（あるいは間投助詞としての）ナァ、そして疑問語につくナの三つが区別されているのである。

佐藤（1973）は大阪の泉南郡岬町多奈川方言の終助詞（佐藤論文では「文末詞」）の記述がなされた論文であるが、この中に、疑問語とともに現れるナ（およびナー）についての指摘がある。しかし「上昇調子をとるのがつね」（p.18）とあり、本稿で取り上げるナとはイントネーションが異なるうえ、挙げられている補充疑問文もノダ文ではないことから、本稿が対象とするナと同じものかどうか判断しかねるところがある。

疑問文に現れるナそのものを扱った論文ではないが、ノダ文の補充疑問文とナの共起について言及しているものに野間（2014）がある。これは大阪方言の三つの準体助詞ノ・ン・ノンを取り上げた論文であるが、その中で「どこ行くノンナ」「あの人誰やノンナ」という例を挙げ、ノンナを補充疑問文にのみ現れる形式としたうえで、「純粋な問いかけだけではなく、反語的な含みも持つ」（p.31）と説明している。また、大阪方言において説明のモダリティを担う形式であるンやネンについても同様に補充疑問文でナと共起できることを指摘している。ただし、準体助詞の記述に重きを置いているため、

当該のナについては「共通語の「ね」に相当する「ナ」とは異なる」（p.31）と述べるに留まり、その文法的意味については詳しい検討がなされていない。

大阪方言のイナについては、高木（2018）において、命令文や禁止文、勧誘文といった行為要求文に生起する複合終助詞であることを指摘し、同じ語が疑問語にも接続することを述べた。しかし、その文法的意味については分析が及ばなかった。命令文とイナの共起については村中（2001）にも指摘があるが、疑問文におけるイナを取り上げたものは管見の限り見当たらない。

2.2. 近隣方言のナ・イナについて

補充疑問文に現れる終助詞ナを正面から取り上げたものに、和歌山市方言を扱った山口（2013）がある。山口は自身の内省をもとに、補充疑問文における終助詞ナが体言にのみ接続すること、「疑い」の表出を基本的な意味としてもつことを明らかにしている。なお、山口のいう「「疑い」の表出」は、具体的には「話し手が、自らが判断できない不明な情報に遭遇し、自身の中でもそれに関して思案しながら、その「疑い」の意を表出する」（p.60、(23)）と説明されている。地理的にも近い和歌山市方言におけるナの記述として注目すべきものである。ただし本論文にはイナについての言及はない。

このほか、談話資料をもとに京都市方言の記述を行った中井（2008：183）に、「共通語の「な」「ね」に訳せない終助詞のナ」としてノダ文につくナが挙げられている。ただし大阪方言とは違って平叙文にもナが接続する。また中井（2010：78-79）には京都市方言の疑問文におけるカイナとイナについての記述があるが、疑問語に直接イナがつくことはないようで、大阪方言とは接続の面で異なりをもつ。またカイナとイナがほぼ同義であるとも指摘しているが、この点も大阪方言については当たらないと思われる。

2.3. 問題のありか

ここまで述べてきたように、大阪方言の補充疑問文に使われるナについては、ノダ文との関連のなかで触れられるにとどまっており、ナそのものの記

述は行われていない。そもそも、疑問文の作られ方の記述自体が欠けているのが現状である。また疑問語に直接つくイナについても詳しいことはわかっていない。ここから、明らかにすべきことは次の3点にまとめられる；(a) 大阪方言の疑問文の全体像、(b) ノダ文の補充疑問文に現れる終助詞ナと疑問語に直接つくイナの形態統語的な特徴の整理、(c) 補充疑問文におけるナ・イナの文法的意味。本稿ではこのうちの (a) と (b) に取り組む。これは (c) を明らかにするうえでも必要なことである。

以下、本稿では大阪方言（摂津方言）を母方言とする筆者の内省をもとに記述を進める。1974年生まれの筆者の有する体系が高年層のそれと異なっている可能性はあるが、今後研究を発展させるためにも、内省で明らかにしうることをまとめておく意義はあると考える。

3. 大阪方言の疑問文

すでに述べたように、本稿で扱う終助詞ナは疑問文の中でも補充疑問文にのみ生起することが可能である。本節では議論の前提として大阪方言の疑問文の構造について簡単にまとめる。構造を中心に扱うので、それぞれの疑問表現の意味的な違いはここでは措く。なお、疑問表現の記述の枠組みおよび例文については井上・小西（2006）を参考にした。

3.1. 真偽疑問文の構造

大阪方言の疑問文は、文の構造の特徴によって真偽疑問文と補充疑問文とに大別される。真偽疑問文は述語の品詞によってその作られ方がやや異なる。動詞の場合は、文終止の形、もしくはこれに終助詞のカを添えた形で疑問文が作られる。ここでいう文終止の形とは、具体的には、基本形（断定非過去形）、過去形、否定形であり、命令形、禁止形、意志形は含まない。[2] いずれもイントネーションは上昇調である。

(3)　a. ［コレ］　タベ[[ル。

b．［コレ］　タベル［［カ。

（これ、食べる(か)？）　［動詞述語・基本形］

(4)　a．［コレ］　タ［ベ］タ［［ー。

b．［コレ］　タ［ベ］タ［［カ。

（これ、食べた(か)？）　［動詞述語・過去形］

(5)　a．［コレ］　タ［ベ］ヘ［［ン。

b．［コレ］　タ［ベ］ヘン［［カ。

（これ、たべない(か)？）　［動詞述語・否定形］

形容詞の場合も同様に基本形もしくは過去形が使われ、終助詞カが添えられることもある。イントネーションはやはり上昇調である。

(6)　a．［コレガ］　エ［［ー。

b．［コレガ］　エー［［カ。

（これがいい(か)？）　［形容詞述語・基本形］

(7)　a．［コレガ　ヨ］カッ［［タ。

b．［コレガ　ヨ］カッタ［［カ。

（これがよかった(か)？）　［形容詞述語・過去形］

次に、名詞・形容動詞を述語にとる真偽疑問文の場合、断定非過去では名詞・形容動詞語幹が文終止の役割を担う（以下、これをゼロ形式の基本形と呼び、ϕで示すことがある）。これにも終助詞のカを付加することが可能である。イントネーションは上昇調を取る。

(8)　a．［アシタ］モ　ヤ［ス］ミ［［ー。

b．［アシタ］モ　ヤ［ス］ミ［［カ。

c．#［アシタ］モ　ヤ［ス］ミ［［ヤ。

（明日も休み（か）？）　［名詞述語・基本形（ϕ）］

(9)　a．オ［ジ］ーチャン　［ゲ］ン［［キ。

b．オ［ジ］ーチャン　［ゲ］ンキ［［カ。

c．#オ［ジ］ーチャン　［ゲ］ンキ［［ヤ。

（おじいちゃんは元気(か)？）　［形容動詞述語・基本形(ϕ)］

（8c）および（9c）に示したとおり、断定辞ヤを添えた形で上昇調のイントネーションを取る文は非文ではないが、これらは命題の真偽を問う疑問文としてははたらかない（上昇調を伴った断定辞ヤの機能については高木2002を参照のこと）。

名詞・形容動詞述語の過去形はいずれもヤッタによって作られる。基本形と同様にカの付加は随意的であるが、上昇調のイントネーションは義務的である。

（10） a．［キ］ノー　ヤ［ス］ミヤッ［［タ。
b．［キ］ノー　ヤ［ス］ミヤッタ［［カ。
（昨日休みだった（か）？）　［名詞述語・過去形］

（11） a．オ［ジ］ーチャン　［ゲ］ンキヤッ［［タ。
b．オ［ジ］ーチャン　［ゲ］ンキヤッタ［［カ。
（おじいちゃん元気だった（か）？）　［形容動詞述語・過去形］

次に、ノダ文の疑問文についてであるが、大阪方言は説明のモダリティを担う形式（いわゆる「ノダ相当形式」）に複数あることで知られる。野間（2013）はノダ相当形式としてノヤ（ンヤ）、ネヤ、ネンヤ、ネンの4形式を挙げ、このうちノヤ（ンヤ）だけが真偽疑問文に使用可能であることを指摘している。野間（前掲）ではノヤとンヤがまとめられているが、両者には微細な違いもあり、野間（2014）の方では分けて扱われている（本稿もこれに従う）。真偽疑問文におけるノヤ・ンヤはノ・ンのようにヤのつかない形で用いられ、後に終助詞カを添えることも可能である。イントネーションは上昇調である。

（12） a．［コレ］　タベ［ン］ノ［［ー。
b．［コレ］　タベ［ン］ノ［［カ。　［ノダ文・ノϕ］

（13） a．［コレ］　タベ［ル］ン［［ー。
b．［コレ］　タベ［ル］ン［［カ。　［ノダ文・ンϕ］
（これ、食べるの（か）？）

ノは基本的に、動詞の撥音便形や否定形など、語末が撥音になる場合に使われる。（13）のような撥音便形でない形の場合にノを付加したとしても非文にはならないが、ンが後続することが一般的である（これについては野間

2014が詳しい)。

このほか、疑問文に使われるノダ相当形式にはノンという形式もある（野間2014)。ノ・ンと同様に終助詞カを伴うことが可能であり、上昇調のイントネーションを取る。

(14)　a．イマ[カ]ラ　[シゴト　イク]ノ[[ン。

b．イマ[カ]ラ　[シゴト　イク]ノン[[カ。

(今から仕事に行くの(か)？)　[ノダ文・ノン]

ここまで、真偽疑問文の構造について述べてきたが、まとめると、上昇調のイントネーションをもつこと、終助詞のカを添えることができること、の2点が特徴として挙げられる。また名詞・形容動詞述語文やノダ文の場合には、基本形として断定辞のヤを取らないゼロ形式が使用される点に特徴がある。

3.2. 補充疑問文の構造

補充疑問文は、①全ての述語文において終助詞のカが生起できない、②名詞・形容動詞述語文とノダ文に断定辞のヤが生起できる、③ノダ文においてノ・ン・ノンだけでなくネヤ・ネンも使用できる、という3点において真偽疑問文とは異なっている。またイントネーションについても④非上昇調（自然下降や下降調）が許容される、という点で真偽疑問文とは異なる。以下、順に説明を加える。

まず①についてであるが、真偽疑問文ではいずれの述語文にも終助詞カの使用が可能であったのに対して、補充疑問文ではこれらはすべて非文となる。この点が、真偽疑問文と補充疑問文を分ける大きな違いといえる。

(15)　a．ナ[ニ]　タベ[[ル。

b．*ナ[ニ]　タベル[[カ。

(何を食べる？)

(16)　a．[ドレガ]　エ[[ー。

b．*[ドレガ]　エー[[カ。

(どれがいい？)

（17） a．イツ［ガ］　ヤ［ス］ミ［［ー。

b．*イツ［ガ］　ヤ［ス］ミ［［カ。

（いつが休み？）

（18） a．ドッチノ　［ヘ］ヤガ　シ［ズ］カ［［ー。

b．*ドッチノ　［ヘ］ヤガ　シ［ズ］カ［［カ。

（どちらの部屋が静か？）

（19） a．ナ［ニ］　タベ［ン］ノ［［ー。

b．*ナ［ニ］　タベ［ン］ノ［［カ。

（何を食べるの？）

次に②について、名詞・形容動詞述語およびノダ文による補充疑問文では、ゼロ形式だけでなく断定辞のヤのついた形式が基本形として許容される。

（20） イツ［ガ］　ヤ［ス］ミ［［ヤ。　（いつが休みだ？）

（21） ドッチノ　［ヘ］ヤガ　シ［ズ］カ［［ヤ。（どちらの部屋が静かだ？）

（22） ナ［ニ］　タベ［ン］ノ［［ヤ。　（何を食べるんだ？）

そして③について、大阪方言におけるノダ相当形式に複数あることは既に述べたが、真偽疑問文にノ・ン・ノンしか使われないのに対して、補充疑問文ではこれらに加えてネヤ・ネンも使用可能である。ただしネンは上昇調のイントネーションを取らない。

（23） ［ドコ　イク］ネ［［ヤ。　（どこに行くんだ？）

（24） a．［ダレガ　イク］ネン。

b．*［ダレガ　イク］ネ［［ン。　（だれが行くんだ？）

さいごに④について、真偽疑問文では上昇調であることが疑問文として必須であるが、補充疑問文にはこうした制約がなく、自然下降であっても疑問文として成立する。これはもちろん、疑問語の存在によるところが大きいと思われる。これによって疑問文であることが明示できるからである。

（25） ナ［ン］ジマデ　ココ　［オ］ル。　（何時までここにいる？）

cf.〈疑問文として〉#マ［ダ］　ココ　［オ］ル。

（26） ［ドコ　イ］タイ。　（どこが痛い？）

cf.〈疑問文として〉#ココ　［イ］タイ。

（27）イ［ツ］　ヤ［ス］ミ。　（いつが休み？）

cf.〈疑問文として〉#キョ［ー］　ヤ［ス］ミ。

（28）［ドレガ　キ］レー。　（どれがきれい？）

cf.〈疑問文として〉#［コレガ　キ］レー。

（29）［ドナイ　シ］タラ　［デキル］ン。　（どうすればできるの？）

cf.〈疑問文として〉#［コナイ　シ］タラ　［デキル］ン。

このように、補充疑問文の構造には真偽疑問文と異なる点があり、これによって両者は区別されるのである。

3.3. 大阪方言の疑問文の構造

ここまでの観察をまとめると表1のようになる。表中の「終止形」という用語は文終止の形のうちの疑問文に使用される形（基本形、過去形など）の総称として用いている。

表1　大阪方言の疑問文の構造

		形式		イントネーション	
		終止形	終止形＋カ	上昇調	自然下降
真偽疑問文	動詞	○	○	○	×
	形容詞	○	○	○	×
	名詞	φ	φ	○	×
	形容動詞	φ	φ	○	×
	ノダ相当	φ	φ	○	×
補充疑問文	動詞	○	×	○	○
	形容詞	○	×	○	○
	名詞	φ、j	×	○	○
	形容動詞	φ、j	×	○	○
	ノダ相当	φ、j、n	×	○※	○

凡例　○：使用可、×：使用不可、φ：ゼロ形式が使用可
j：ヤの付く形が使用可、n：ネヤ・ネンが使用可
※但しネンを除く

表に示したとおり、真偽疑問文の特徴は終助詞のカが使用できること、ならびに上昇調のイントネーションが義務的であることにある。逆に補充疑問文の特徴は、終助詞カが許容されないこと、イントネーションに制約がないことにある（但しネンを除く）。名詞・形容動詞述語文とノダ文においては、基本形にゼロ形式が使われる真偽疑問文と、断定辞のヤやノダ相当形式のネヤ・ネンが許容される補充疑問文、とまとめることができる。

4. 疑問表現と終助詞ナ・イナの形態統語的特徴

本節では、疑問文における終助詞ナ・イナの形態・統語面における特徴について整理する。ナについて4.1節で、イナについて4.2節で扱う。

4.1. ナの形態統語的特徴

本稿が対象とする終助詞ナは順接のアクセントをもち、自然下降のイントネーションを基本とする（京阪方言における助詞のアクセントについては中井2002を参照）。下降調も可能だが、上昇調を取ることはない。このため、上昇調を必須とする真偽疑問文には生起することができない。

（30） a．イ［ツ］　ク［ル］ンナ。　［自然下降］
　　 b．イ［ツ］　ク［ル］ンナ］ー。　［下降調］
　　 c．*イ［ツ］　ク［ル］ン［［ナ。　［上昇調］

先にも触れたとおり、ナはノダ文の補充疑問文にのみ生起し、他の補充疑問文とは共起できない。

（31） ［ドコガ　イ］タインナ。
（32） *［ドコガ　イ］タイナ。

補充疑問文に使われる説明のモダリティ形式にはノ（ヤ）・ン（ヤ）・ノン・ネヤ・ネンがあることを3節で確認したが、このうちナが接続できるのはン・ノン・ネンの3形式で、ノ、ノヤ、ンヤ、ネヤにはナは接続しない。

（33） *ナンデ　［カエン］ノナ。　（なぜ帰るのよ）

（34）　*ナ[ニ]　タベ[ン]ノヤナ。　（何を食べるのよ）

（35）　*[ダレニ　キク]ンヤナ。　（誰に聞くのよ）

（36）　*[ドコデ]　ミ[ン]ネヤナ。　（どこで見るのよ）

また、述語に名詞や形容動詞がくる場合はナの共起にさらに制限がある。名詞・形容動詞にノダ相当形式が接続する場合、それぞれの形式はナン・ヤノン・ヤネンとなるが、このうちナンにはナを接続させることができない。ノの場合は（ナノではなく）ヤノになるが、ノが（述語の品詞にかかわらず）ナと共起できないことは上に述べたとおりである。

（37）　a．*[コレ　ダレノ]　カ[サ]ナンナ。

b．[コレ　ダレノ]　カ[サ]ヤノンナ。

c．[コレ　ダレノ]　カ[サ]ヤネンナ。

（これは誰の傘なのよ）

（38）　a．*アンタノ　[ドコガ　ゲ]ンキナンナ。

b．アンタノ　[ドコガ　ゲ]ンキヤノンナ。

c．アンタノ　[ドコガ　ゲ]ンキヤネンナ。

（あなたのどこが元気なのよ）

述語の品詞によってなぜこのような違いが出るのか、その要因については現時点では考えをもっていないため、現象の指摘に留める。

4.2. イナの形態統語的特徴

次に、イナの形態統語的特徴について整理する。イナのアクセントは低接で、直前にピッチの下がり目がある。イントネーションはナと同じく非上昇（自然下降または下降調）であり、上昇調は取らない。

（39）　[ダレ]ーナ（＜誰＋イナ）、ナ[ニ]ーナ（＜何＋イナ）

イナの特徴は疑問語に直接つくことができる点にある。ただし接続は体言相当の疑問語に限られ、「どう」「どんな」「どない」のような疑問副詞にはイナをつけることができない（ただし「なんで」は例外）。また、内省では体言相当の疑問語のなかでもイナの接続が自然と感じられないものもあり、

適格性にゆれがある。たとえば、(39) に挙げた「誰」「何」のほか、「なんで」にイナがつくことは自然であるが、「いつ」「どこ」にイナを接続させた形式は筆者の使用語彙ではなく、「昔の言い方」と感じられる。高年層と比べてイナの使用範囲が限定的になっている可能性がある。

さて、イナは疑問語に助詞のついた形にも接続可能である。以下に具体的な形式を記す。

(40) 疑問語＋が：[ダレガ]イナ、ナニ[ガ]イナ、イツ[ガ]イナ、[ドコガ]イナ

(41) 疑問語＋の：[ダレノ]イナ、ナン[ノ]イナ、イツ[ノ]イナ、[ドコノ]イナ

(42) 疑問語＋を：[ダレオ]イナ、ナニ[オ]イナ

(43) 疑問語＋に：[ダレニ]ーナ、ナニ[ニ]ーナ、[ドコニ]ーナ

(44) 疑問語＋で：ナニ[デ]ーナ、[ドコデ]ーナ

(45) 疑問語＋と：[ダレト]イナ、ナニ[ト]イナ

「誰のイナ」「何のイナ」「誰をイナ」「何とイナ」など、中にはやや許容度の下がるものもあるが、おそらく筆者の使用頻度の低さによるもので不適格というわけではない。また内省では、「いつ」「どこ」に直接イナを付加した形式に比べると「いつがイナ」「どこでイナ」のように助詞のあとにイナが接続した形の方が自然である。これも使用頻度と関わっているものと思われる。

このように、疑問語（＋助詞）に直接つくことができるイナであるが、逆に言うとイナの生起環境はこれに限られている。そのため、先述のナの生起する位置にイナが現れることはできない。

(46) *ナ[ニ]　タベ[ル]ンイナ。

(47) *[セキニ]ンシャ　[ダレ]ヤネンイナ。

イナは疑問語および疑問語を含む句にしか接続しないため、文の形式も必然的に限られてくる。具体的には、イナが使われるのは疑問語（を含む句、以下同じ）だけからなる一語文か、「AはB」という構成でBに疑問語が来る倒置指定文・倒置同定文（西山2003）である。

（48）　A：アン［タ］モ　［ナカナカ］　ス［ミ］ニ　［オ］ケン［ナ］ー。
（あなたもなかなか隅に置けないね）
B：ハ［［ー］。ナニ［ガ］イナ。　［一語文］
（は？何がよ）

（49）　［カ］ンジ　［ダレ］ーナ。　（幹事は誰よ）　［倒置指定文］

（50）　［アレ］　ナ［ニ］ーナ。　（あれは何よ）　［倒置同定文］

なお、「AはB」だけでなく「AってB」という構成になることもある。

（51）　コ［ナ］イダ　［ユート］ッタ　アンタノ　［ス］キナ　ヒトッテ、
［ダレ］ーナ。
（この間言っていたあなたの好きな人って誰よ）

なお、（48）～（51）はノダ相当形式＋ナによっても表すことが可能である。ネンを例に取ると次のようになる。

（52）　ナニ［ガ］ヤネンナ。

（53）　［カ］ンジ　［ダレ］ヤネンナ。

（54）　［アレ］　ナ［ン］ヤネンナ。

（55）　コ［ナ］イダ　［ユート］ッタ　アンタノ　［ス］キナ　ヒトッテ、
［ダレ］ヤネンナ。

（48）～（51）は疑問語（＋助詞）にイナが付いたもの、（52）～（55）はノダ相当形式にナが付いたものであるので、構造から考えると両者には意味的な違いが期待される。しかし疑問語が述部にくるこれらの文は意味的にかなり近いように思われる。意味面における異同については今後検討したい。

5. ナとイナの特異性

補充疑問文におけるナとイナの接続をまとめると表2のようになる。ここまでみてきたとおり、イナは疑問語（＋助詞）にしか接続せず、ナはノダ相当形式の後にしか生起しない。またナは、複数あるノダ相当形式のうちノには後接せず、名詞や形容動詞にンを接続させたナンという形式にも後接しない。

表2　補充疑問文と終助詞ナ・イナの生起

述　語	ノダ相当形式	ナ	イナ
動詞・形容詞	（なし）	×	×
	ノ	×	×
	ン	○	×
	ノン	○	×
	ネン	○	×
名詞・形容動詞	（なし）	×	×
	ヤノ	×	×
	ナン	×	×
	ヤノン	○	×
	ヤネン	○	×
疑問語（＋助詞）	（なし）	×	○
	ヤノ	×	×
	ナン	×	×
	ヤノン	○	×
	ヤネン	○	×

凡例　○：接続可、×：接続不可

他の終助詞と対照させてみると、断定辞を介さずにノダ相当形式のンに直接つくことができるというナの性格は注目に値する。というのも、大阪方言では一般に、体言相当の語句に終助詞が直接つくことはできず、断定辞のヤを介することが必要だからである。大阪方言には標準語の「よ」に相当するとされるデやワ、「ね」「な」相当とされる（平叙文の）ナなどの終助詞があるが、体言に接続する場合にはいずれもヤが必須である。

前接語との接続に断定辞を介さないという事実は、この終助詞が断定辞と範列的な関係にあることを予想させる。現段階では想像の域を出ないが、筆者は、疑問文に使われるナの出自を断定辞の仮定形ナラに求めることができるのではないかと考えている。それはたとえば、山口（2013）が和歌山市方言においてナのほかに異形態としてナラがあると述べていることや、岡山県備前方言における補充疑問文のいわゆる「係り結び」の動態を記述した岡本（2015）に仮定形ナラの終助詞化の過程においてナーやナという異形態

が成立しているという指摘があることなどと結びつく仮説である。仮説をたしかなものにするためには、大阪方言におけるナの意味記述を行い、その上で近隣諸方言におけるナのあり方についても見ていかなければならない。

断定辞を必要としないという点では、同じくイナも大阪方言においては特異な終助詞である。疑問語にしか接続しないという点で疑問文におけるイナの適用範囲は極めて狭いが、その一方でイナは、命令文や禁止文、勧誘文といった行為要求文にも用いられる（高木2018）。イナの構文的な性格をどのように位置づけるべきか、引き続き検討する必要がある。

6. まとめと今後の課題

本稿では、大阪方言の補充疑問文に現れる二つの終助詞ナ・イナの包括的な記述のために、その前提として疑問文の構造を整理し、ナとイナの形態統語的な特徴について記述した。これを踏まえて、両者の意味用法の分析を行うことが今後の課題である。本稿では便宜的にナやイナの訳に「よ」という標準語を充てたが、今後は、それぞれが発せられる具体的な対話の場面に注意を払って用法の記述をし、それらに共通する中心的な意味を導くことを目指したい。その際には、質問・詰問・反語など疑問文の構造の違いがもたらしうる意味的な違いについても留意したい。こうした記述が、疑問文に生起するナやナラといった終助詞を有する他の方言との対照研究にも資するものとなればと思っている。

［付記］

本稿はJSPS科研費 26244024 の助成を受けたものである。

［注］

1）　以下、本稿で用いる例文はいずれも大阪方言（摂津方言）を母方言とする筆者の作例である。筆者は 1974 年生まれで、3 歳までを兵庫県神戸市で過ごした

ほかは1年間の海外留学期間を除いて大阪府豊能町在住である。例文はカタカナ表記とし、必要に応じて末尾の（　）内に標準語訳を記す。ピッチの表記は沖（2017）を参考に［、］によって音の高低を示す。［がピッチの上昇する位置、］が下降する位置である。［［は通常（アクセントとして）期待される高さより高いピッチで実現されることを表し、主として上昇調のイントネーションを表す際に用いる。また、例文冒頭の＊はその文が文法的に不適格であることを、？はその形式の使用が不自然であることを表す。#はその形式の使用が語用論的に不適切、もしくは意図する表現としては機能しないことを表す。

2）　大阪方言の動詞には文終止の形を作る屈折接辞として次のものがある；①断定非過去の*-(r)u*，②過去の*-(i)ta*，③否定非過去の*-(a)N*，*-(a)heN*，④否定過去の*-(a)naNda*，*-(a)henaNda*，⑤過去説明の*-(i)teN*，⑥命令の*-e*，*-i*，*-ro*，⑦禁止の*-(r)una*，*-(i)na*，⑧意志の*-(j)o*。このうち疑問文を作ることができるのは①～④であるが、④は徐々に使われなくなりつつある形式であるため本文中では割愛した。なお、動詞の構造についての上記のような考え方は、本学の大学院生を中心的なメンバーとしていた「大阪方言研究会」（2012-2014年、現在休会中）における文法スケッチの議論・検討が元になっている。ただし本稿における誤りの一切は筆者の責任に帰す。

［引用文献］

井上優・小西いずみ（2006）「疑問表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック2』科研費成果報告書

岡本進（2015）「岡山備前方言における疑問詞の係り結びについて」『思言　東京外国語大学記述言語学論集』11：101-108，東京外国語大学地域文化研究科・外国語学部記述言語学研究室

沖裕子（2017）「談話論からみた松本方言の判断終助詞と通知終助詞」『方言の研究』3：217-238，ひつじ書房

郡史郎編（1997）『日本のことばシリーズ27　大阪府のことば』明治書院

佐藤虎男（1973）「大阪府方言の研究（2）―泉南郡岬町多奈川方言の文末詞（一）―」『学大国文』16：15-26，大阪学芸大学国語国文学研究室

高木千恵（2002）「大阪方言における断定辞ヤの文末詞的用法について」『阪大社会言語学研究ノート』4：143-152，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座社会言語学研究室

高木千恵（2018）「大阪方言の行為要求表現における終助詞ナの共起と前接語の長呼について」『方言の研究』4：21-49，ひつじ書房

中井幸比古(2002)『京阪系アクセント辞典』勉誠社
中井幸比古(2008)「京都方言の形態・文法・音韻(1)―会話録音を資料として(1)―」『方言・音声研究』1：9-200，方言・音声研究会
中井幸比古(2010)「京都方言の形態・文法・音韻(3)―会話録音を資料として(3)―」『方言・音声研究』4：77-106，方言・音声研究会
西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―』ひつじ書房
野間純平(2013)「大阪方言におけるノダ相当表現―ノヤからネンへの変遷に注目して―」『阪大日本語研究』25：53-74，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
野間純平(2014)「大阪方言における準体助詞ン・ノ・ノン―ノンの分布を中心に―」『阪大社会言語学研究ノート』12：24-36，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座社会言語学研究室
牧村史陽(1979)『大阪ことば事典』講談社
村中淑子（2001）「大阪方言における命令表現について―臨地調査と文献資料比較―」『徳島大学国語国文學』14：(24)-(36)，徳島大学国語国文学会
山口華奈(2013)「和歌山市方言における疑問詞疑問文の文末詞「ナ」」『阪大社会言語学研究ノート』11：57-65，大阪大学大学院文学研究科日本語学講座社会言語学研究室
山本俊治(1962)「大阪府方言」楳垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂
山本俊治(1982)「大阪府の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 7　近畿地方の方言』国書刊行会

（文学研究科准教授）

SUMMARY

The Morpho-syntactic Features of Interrogative Sentences and Sentence-Final Particles *=na* and *=ina* in Osaka Dialect

Chie TAKAGI

This paper focuses on the structure of interrogative sentences and the grammatical features of sentence-final particles (SFPs) *=na* and *=ina* in the two types of question sentences in Osaka dialect, namely, the polar question and the content question. Both types differ in intonation, predicate forms and the co-occurrence of SFPs. The polar question includes; (1) rising intonation in the end of the sentence, (2) non-use of copular *=ja* as a predicate marker in nominative sentences, and (3) co-occurrence with a SFP *=ka* as an interrogative marker. On the other hand, the content question requires interrogative pro-forms such as *dare* 'who', *nani* 'what', *icu* 'when', *doko* 'where' and *naNde* 'why'. Also, the content question is contrastive in which the rising intonation is not obligatory, the copular *=ja* is optional, and the use of SFP *=ka* is grammatically incorrect.

SFPs *=na* and *=ina* are not used in the polar question but in the content question without rising intonation. However, their connection is syntactically limited to a certain part of speech. That is, *=na* requires the explanation markers such as *=N*, *=noN*, *=neN* and it does not allow direct connection with other predicates. Unlike other general SFPs, *=na* can occur right after *=N* without copular *=ja*, although *=N* has grammatical features of nominative. This indicates that *=na* and copular are mutually exclusive in syntax, leading to the prediction that *=na* may have derived from a conditional form of copular, *=nara*, which is observed in content question sentences in other dialects. The other SFP *=ina* mandatorily comes just after interrogative pro-forms mentioned above, e.g. *dareena* (< *dare=ina*) 'Who is it?'. It does not occur with other predicates even if the sentence contains interrogative pro-forms.